

TOPPOS

TOKIWA POST

VOL. 37
SPRING

常磐大学
 ■大学院 ■国際学部
 ■人間科学部 ■国際学部
 ■コミュニティ振興学部
 常磐短期大学

常磐大学高等学校
 常磐短期大学 附属幼稚園

[2005.3.20]

発行/学校法人 常磐大学 ■編集/常磐大学広報課 水戸市見和1丁目430-1 電話 029(232)0007 http://www.tokiwa.ac.jp/



①開所式に当たり挨拶をする諸澤英道理事長。
 ②芝浦サテライトキャンパスが設置されたキャンパス・イノベーションセンター。
 ③テープカットを行う。諸澤英道理事長(中央)、大堀哲学長(左)、吉澤繁男理事(右)。

被害者支援の東京拠点 サテライトキャンパス開設

被害者学研究科◎芝浦サテライトキャンパス開所式

2005年4月に開設する『常磐大学大学院被害者学研究科』の東京の拠点となる芝浦サテライトキャンパスが完成し、1月20日に開所式が開催された。芝浦サテライトキャンパスは水戸(本校)とインタラクティブな授業を実現し被害者支援のエキスパートを育成する。



東 京都港区芝浦のキャンパス・イノベーションセンターに、本学大学院「被害者学研究科」のサテライトキャンパスが設置され、2005年1月20日、開所式が行われた。当日は、アジア刑政財団の敷田総理事長や慶應義塾大学名誉教授の宮澤浩一氏をはじめ、被害者支援を実践する多くの関係者が集まり、本研究科・芝浦サテライトキャンパスに対する期待の大きさを物語っていた。開所式では、諸澤英道理事長が挨拶。2003年10月に開設した「国際被害者学研究科」のさまざまな取り組みにふれた上で、この度の大学院被害者学研究科の開設も、このような活発な研究活動に支えられて成り立ったもので今後、常磐大学が被害者学の分野において、日本の、あるいは世界の指導的な役割を演じることができればと思っています」と語った。その後、来賓挨拶に続いて、4月から授業が展開されるセミナー室の前でテープカットを行い、当日午後から行

なわれた。「国際被害者学研究科」第2回シンポジウム」に引き継ぐ形で、開所式は幕を閉じた。サテライトキャンパスは、社会人の中でも特に被害者と接する実務に従事する現職者を受け入れるための、都心における拠点となる。そのため、水戸(本校)と同様、平日夜間や週末にも受講することができる。また、eラーニングおよびテレビ会議システムを含んだ双方向遠隔授業のシステムを導入し、水戸と東京でライブ型の遠隔授業を取り入れた授業運営を実現する。このライブ型の遠隔授業では複数のディスプレイに教員、黒板、資料などの画面が鮮明に双方向で投影され、学生の質問事項についてもリアルタイムで回答や補足説明が確認できるシステムを構築している。また、この授業コンテンツについてはサーバーに保存することができるため、ストリーミング型のeラーニングにも対応することを検討。実現するとパソコンのインターネットなどで授業を受けることも可能になり、学生が後日、授業の復習や確認ができるようになる。さらに、同センター内には他大学の学生たちと交流を深める「情報交換スペース」や「情報発信コーナー」、また「企業関係者との交流ができる「リエゾンコーナー」なども設置され、充実した学びの環境が整えられている。

◎シリーズ37 ヒイラギナンテン

昆虫との深い関係を思わせる不思議な植物

ヒイラギナンテン(柃南天)は、もともと台湾、中国、ヒマラヤ原産の常緑低木。江戸時代に、薬用植物または観葉植物として日本に渡来したと言われています。この名前は葉がヒイラギに似ていて、実はナンテンに似ているところから付けられました。しかし、秋に付ける実は、赤と言うより黒紫色。3月から4月にかけて、甘い香りのする小さな黄色い花を咲かせます。日陰でも良く育つので、目立たない場所に植えられていることが多い植物です。主に関東以南に分布し、観賞用の庭木として植えられているものは、1メートルくらいに揃えられています。放置しておくと4メートルに達する場合もあるといわれています。太陽の光を受けて開ききった花の中心部を針のようなもので触れると、普段は花弁に寄り添って開いている6本の雄しべが、一瞬のうちに中心に向かって動きます。これは昆虫が花に入ったとき、花粉を身体に押しつけるため。植物と昆虫のつながりの深さを感じさせる不思議な現象です。本学のキャンパスでヒイラギナンテンを探し、実験してみたいかがでしょうか。



常磐の四季

常磐大学大学院被害者学研究所／常磐大学芝浦サテライトキャンパス開所記念

国際被害者学研究所 第2回シンポジウム開催



1日目

「被害者の声が社会を変える」

常磐大学大学院被害者学研究所及び芝浦サテライトキャンパス開所記念「国際被害者学研究所 第2回シンポジウム」が1月20日、21日の2日間、開催された。1日目のシンポジウムは水戸と芝浦をつなぐ双方向遠隔システムを取り入れて行われ、両日ともに貴重な発言が飛び交う充実したシンポジウムとなった。

基調講演 ● 国連の取り組みと犯罪被害者等基本法

被害者の権利を世界へ

日本の「犯罪被害者等基本法」に安全と安心が盛り込まれたということは非常に素晴らしいことで、賞賛に値する進歩的な法律であると思います。これまで、被害者を支援することなくただ証人として利用してきた傾向があります。しかし、被害者に証人として出廷してもらいたいのであれば、彼らの待遇を改善しなければなりません。そういった意味でも被害者は損害を賠償されなくてはならない。そして痛みを緩和する、普通の生活に戻る、といった文言が入ったのは、大きな前進であると考えます。そして、被害者の保護を考えると、

パネルディスカッション ● 基本法制定によって何がどう変わるか

基本法実施に向けた次のステップへ

基本法の条文に、モニタリング（調査）と書いてある部分がありますが、EUではフレームワークと呼ばれているものがあり、そこでは「モニタリング制度」が採用されています。条約で決められたことが実施されているかどうかモニタリングするわけです。法律ができて具体的な政策を行う場合は、実態を把握する必要があります。そして、新しい政策がうまく機能しているかどうか、モニタリングすることが大切になってきます。モニタリングとリサーチは、必要不可欠なことだと思います。



カナダ オタワ大学犯罪学部教授 アーヴィン・ワラー氏

1985年国連被害者人権宣言の採択に貢献。世界中の政府に対し、犯罪の減少と被害者の権利について助言を行っている。元モントリオール国際犯罪防止センター事務局長。カナダ、イギリス、南アフリカ、アメリカで犯罪防止政策見直しに参画。世界被害者学協会元会長。



弁護士 獨協大学特任教授 住田裕子氏

東京大学法学部卒。地検検事、法務省民事局付検事、法務大臣秘書官などを歴任後、弁護士登録。第一東京弁護士会所属。住宅債権管理機構、現職。理回収機構、法律顧問を経て、現在、内閣府男女共同参画会議議員、経済産業省総合資源エネルギー調査会委員、防衛施設中央審議会委員等を務める。



地下鉄サリン事件被害者の会 代表世話人 高橋シズエ氏

1995年3月に起きた地下鉄サリン事件で、営団地下鉄丸の内線有楽町線有楽町駅で発生したサリンによる被害者救済のための活動する。また報道被害改善を願い、河原理子氏、朝日新聞編集委員と共著で「犯罪被害者が報道を変える」を出版。

事件からまもなく10年になるというところ、現在の生活に支障がない被害者が、約2割いると思われず。しかし労災保障が適用にならなかった被害者で、犯罪被害者等給付金を受ける厳しい資格を満たしているのは2人だけです。地下鉄サリン事件の被害者は、国からの補償があったと思われていますが、それはまったくの誤解で、犯罪被害者に対する補償制度そのものがないのです。今回の基本法で、ぜひ被害者の補償制度を整えて欲しいと思っています。



全国犯罪被害者の会 幹事 林良平氏

1995年1月25日、看護師として働いていた妻が帰宅途中、いきなり刃状の包丁で腰背部を刺された。出血性ショック状態で搬送され、一命をとりとめた。事件からまもなく10年となるが、後遺症がひどく車椅子の生活を余儀なくされたままである。事件後、犯罪被害者の権利を確立する会を設立。

基本法は、すでに動き始めています。まず、性犯罪者の服役後の居住情報を警察が把握する体制づくり。これが法務省と警察の間で協議されはじめてました。2つめは刑務所での矯正教育。現行の監獄法では任意参加だった教育を、受刑者全員に義務付けるように改正されることになりました。こういった動きに被害者の立場に立った政策転換というものを見ることはできると思います。これからの課題は、基本法制定で何が変るのか、ではなく何を变えていくのか。今後の活動が重要になります。



常磐大学 理事長 諸澤英道氏

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。常磐大学学長などを歴任。専門は被害者学、犯罪学、刑事法学、刑事政策学、少年法制。日本被害者学協会理事、国連国際学術専門評議会理事、アジア刑政財団学術評議員、(社)いばらき被害者支援センター顧問、全国犯罪被害者の会顧問。

今回の法律の名称は、犯罪被害者等基本法です。なぜ「等」が入っているのかというと、定義の中に「この法律において犯罪等とは犯罪およびこれらに準ずる心身に有害な影響を及ぼす行為をいう」という文言があるからです。これまでは、犯罪の被害者だけでなく、その周辺の人たちは対象にならなかつた。しかし昨今はストーカー、虐待、DV、セクハラといった行為が新しい社会問題になっていきます。その意味で、今まで問題にならなかつた社会現象を掘り起こす必要性を感じています。



常磐大学教授 富田信穂氏

慶應義塾大学大学院法学研究科公法専攻博士課程修了。専門は犯罪学、被害者学、日本被害者学協会(理事)、日本犯罪社会学会、日本刑法学協会、Academy of Criminal Justice Sciencesなどの会員。(社)いばらき被害者支援センター理事長、全国被害者支援ネットワーク副会長としても活躍。

基調講演① 身体的児童虐待とその影響

両親間の暴力が児童の身体虐待へ

欧州6カ国で調査した結果、両親間の暴力が児童虐待を予見する最も重要な要素です。子どもはその暴力を見ることを強制されており、人質として使われてきました。両親の間で喧嘩が起



オランダ フライエ大学教授 ルード・ブレンズ氏

■心理学者。サイコセラピスト。1987年博士号取得。1974年以来、身体的・性的虐待の問題に取り組み。阿姆斯特ダム自由大学で法廷心理学者、法廷評価の一機関であるOORA(法廷評価)ディレクター、Wageningen(法廷心理学)外来クリニック、上席コンサルタント。

2日目

「児童虐待—国際的視点から見た原因と対応」



こらないか、自分は介入すべきが、常に気を使っています。DVが子どもに及ぼす影響には、完璧な振る舞いや動物虐待などの「外的な問題」、抑うつ、自殺衝動、母親への過度の依存などの「内的な問題」、感情麻痺、睡眠障害などの「PTSD」、共感的な反応の欠落による「社会的な行動」、暴力が世代間で伝わる「その他」があります。

暴力の被害者・事件の証人となる子どもに対する面接では、安心して話せると子ども自身が思えることが重要で、適切な条件のもとで行わなければなりません。自分に何が起るかを具体的に知っているからです。

基調講演② 日本における子ども虐待への社会的対応

人材をふやし子ども虐待への社会的対応

いまの日本の子ども虐待への社会的対応の仕組みはあまりにも児童相談所に頼り過ぎています。警察、裁判所の関与で児童相談所と警察と家庭裁判所が共同するような仕組みづくりが課題



日本社会事業大学専門職大学院 教授・研究科長代行 高橋重宏氏

■日本子ども家庭総合研究所子ども家庭福祉研究部長。日本社会福祉学会会長、(社)日本社会福祉士養成校協会会長。日本子ども家庭福祉学会会長。日本社会福祉実践理論学会副会長、日本保健福祉学会副会長。岡山県立大学大学院客員教授。

被害者への理解と支援の育成

子どもに対するネグレクトは、通常考えられているよりも広範に存在し、恵まれない階層のみならず恵まれた階層にも起こっており、先進国でも途上国でも起こっている問題です。そしてネグレクトは、抑うつや交際相手に対する暴力を行う可能性を高めています。比較的マイナーなネグレクトでも、そうしないように両親を援助することが、精神衛生上の問題や家庭内暴力の予防に大いに役立ちます。ですから、できるだけたくさん両親に対して発信することが助けになると考えています。



アメリカ ニューハンプシャー大学教授 ムーレイ・ストラウス氏

■社会学教授。ニューハンプシャー大学で家族研究所を設立し共同所長。社会学問題学会会長、東部社会学会会長、全米家族関係協議会会長、アメリカ科学進歩協会特別会員。

子どもの権利を擁護

日本では「子どもの権利」意識が育っていません。親権の一時制限を裁判所が行える制度が必要です。また現在は、加害者である親に対応する仕組みがありません。つまり子どもに対する手当て、親に対する治療プログラム、そして、親と子どもがもう一度生活できるようなサポートが必要なのです。

■最後に専門性の問題です。つまりあげた仕組みを誰が運用できるかが問題で、現実のニーズに対応できる専門家を養成しなければなりません。お金をかけて専門的な人材を増やし、本当の意味で「子どもの権利」を擁護していくことが我が国の重要な課題だと思います。

児童の事故以外の傷害

児童の事故以外の傷害「社会的に認められない性的な交渉」に対して、社会はいくつかの対応の仕方をつくり出しています。一つは「強制的な通知」。アメリカでは子どもに事故以外の傷害を発見したときは社会機関に報告する義務がある。社会の反応は非常に有効で、専門家が家に来るだけで効果があります。



常盤大学教授 ゲルド・キルヒホッフ氏

■ニダーラント下州応用科学大学社会学部教授として、刑事法、犯罪学、被害者学を担当。アメリカノースカロライナ大学シャーロット校刑事司法学部訪問研究員。世界被害者学会前会長。2003年10月より現職。

法務総合研究所が行った児童虐待被害者等に関する一般市民に対する調査と少年院在院生に対する調査の結果、児童期に受けた虐待被害が成人期の生き方に影響を及ぼすと考える人が過半数存在することが分かりました。少年院在院生は一般市民より児童虐待被害の比率が高く、被害を受けた時期が早いほど性格に影響を及ぼすという結果も出ています。虐待被害を有する人は「自分もやっってしまうのではないかと不安をもっています。親に失敗させないような支援が大切だと思います。」



早稲田大学 文学部助教授 藤野京子氏

■少年鑑別所法務技官、財団法人矯正協会附属中央研究所主任研究員、法務省法務総合研究所室長研究官等を歴任。2004年法務省を退職し、同年4月から現職。臨床心理士。

質疑応答

長井 児童虐待の加害者への対応の中で、治療可能な方とそうでない方をどう判別するのが教えてください。ワラー 親になる前に、子どもを育てるにあたって暴力を使わないように学校教育で教えることです。

西村 乳児や胎児が虐待を受けている場合はどうすれば良いのでしょうか。ブレンズ 性的虐待の痕跡は、子どもであれば8〜9時間で消えてしまうので素早い対応が必要になります。高橋 健診が重視されていて、来ない親については向いて母子の状況をチェックするように通知が出ています。西村 夫の妻に対する暴力と子供への暴力を一緒に扱うべきでしょうか。高橋 日本では分けて考えていますが、担当省庁の連携が必要だと思います。

諸澤 内閣府でも、DV、チャイルドアブュース、セクハラ、ストッキングなどが全部ばらばらであることの問題が盛んに出ています。近い将来、法の見直しで必ず議論されると思っています。



常盤大学教授 長井進氏

■慶應義塾大学大学院社会学部教育心理学専攻修士課程修了。日本心理臨床学会・日本被害者学会・日本家族心理学会・世界被害者学会。1998年4月より現職。



常盤大学大学院 被害者学研究科研究科長(予定) 西村春夫氏

■国際基督教大学卒。科学警察研究所において犯罪・非行の研究に従事し、同防犯少年部長、国土院大学教授、明治大学大学院法学研究科、早稲田大学大学院法学研究科、家庭裁判所調査官研修所、法務省矯正研修所などの非常勤講師を歴任。

弓道を通して精神を鍛練する

■常磐大学弓道場「尚志館」開所式

常磐大学弓道場「尚志館」が完成し、1月13日に開所清祓式が尚志館内において開催された。

開所式に参列したのは、諸澤英道理事長をはじめとする大学関係者の他、茨城県弓道連盟の会長を務める柴田猛範士八段など弓道関係者、また本学に留学している6名の外国人学生も見学に訪れ、日本の伝統的な儀式に興味深気に見入っていた。式は八幡宮の神主による清祓が行



●「墓目」を奉納する柴田猛範士八段(上)。
●本学弓道部員たちも、伝統的な開所式に参加した「一つの射礼」(左)。

われた後、諸澤理事長が「この施設を弓道部だけではなく、学生、教職員、精神鍛練の場として活用していただきたい」と呼びかけ、と挨拶。その後、来賓挨拶として柴田会長より「一本の矢を集中して射ることができるよう精神を鍛え、日本だけでなく世界の弓道人として活躍できるように、この弓道場を活用していただきたい」とお言葉をいただいた。



次に首を降す鶴矢(かぶらや)を鷹よけとして射る「墓目(ひきめ)」を柴田会長が奉納。本学弓道部員に

よる「矢渡し(やわたし)」「一つの射礼(ひとつまとしやれい)」「一手射礼(いつてしやれい)」と続き、開所式は幕を閉じた。

の「尚志」とは「孟子」の「尽心の中にある「人は志を高尚に保つべきである」という言葉に由来し、常に仁に身を置き、義によって事を行うことを理念とし命名された。

射場は延べ115.6平方メートル、立ち回りは延べ310平方メートル。立ち人数は5人と施設環境も充実している。弓道部は1996年に創部され、部員数は、現在26名。関東学生弓道連盟北関東ブロックで男子は1部リーグ、女子は2部リーグと優秀な成績を修めている。

同窓会活動の活発化を推進

■常磐大学連合同窓会/常磐大学同窓会館竣工記念式典



●同窓会館の正面には、クロカネモエのシンボルツリーが植えられ、諸澤理事長をはじめとする各同窓会長らによる記念植樹が行われた。

現在、在までそれぞれに活動していた常磐大学大学院、常磐大学、常磐短期大学、常磐大学高等学校、常磐短期大学附属幼稚園の同窓会をつなぐ「学校法人常磐大学連合同窓会」が結成され、2月1日に発足式が行われた。

連合同窓会の目的は、各同窓会の自主性を尊重し連絡機関として機能すること、それぞれの事業を支援し各組織間の相互協力体制を整えること。卒業生が「常磐」の名のもとに一体化することで、法人全体の発展に寄与することとなる。

初代連合会長に選出されたのは、常磐短期大学同窓会・みわの会で会長を務める中崎啓子氏。設立にあたって尽力を賜った関係者に感謝の意を表しながら、「母校の応援とともに会員の親睦を図りながら、会の活性化に努力していきたい」と思っています。また、同窓会規

点として「常磐大学同窓会館」が竣工となり、卒業生の活動の場のみならず、在学生、教職員の皆様にも活用いただけるよう願っています」と語った。

諸澤英道理事長は、「連合同窓会を中心に卒業生が本学に期待をもっていたとき、私たちがそれに応える努力をすることで、21世紀の社会から評価される学校を目指す第一歩にしたいと思えます」と抱負を述べた。



同窓会館は、エントランスホール、応接室、楓ホール、会議場等からなり、楓ホールには松井エイコ氏によるステ



●「楓ホール」の内装は、天に向かつて伸びゆく教会を思わせる設計。正面のステンドグラス「共に見いだす時」と絶妙なバランスを見せている。

ンドグラスが設置され、美しい採光を演出している。共に見いだす時」と題された正面の作品は共に学んだ時間を心の中の輝きとして見いだす人間を象徴。背面の「共に語る時間」はこの場に集う人間の内面が響き合うことを象徴している。明るく浮かび上がるステンドグラスのように、同窓生たちの円滑な交流の場として活用が期待される。

常磐大学大学院同窓会発会式 大学院卒業生の交流組織が誕生

■Campus News



●常磐大学大学院同窓会・初代会長に選出された森山賢一さん。

2005年1月19日、諸澤英道理事長、大堀哲学長、正田亘人間科学研究科長、佐藤守弘人間科学研究科長など諸先生方ご列席のもと、学生ホールで常磐大学大学院同窓会発会式が開催された。学内に勤務する者、遠く三重県から、また東京近辺や県内からも多くの修了者が集まり旧交を温めた。

常磐大学大学院人間科学研究科は1989年に発足以来、修士課程修了者139名、博士後期課程修了者(満期退学者を含む)19名を輩出してきた。現在では数多くの修了生が北海道から九州・鹿児島まで大学などの教壇で、また研究所や企業など実社会で活躍している。また本年度にはコミュニケーション振興学研究科、この春から被害者学研究科が設置されて、大学院組織も順調に拡充している。



●発会式の後には懇談会が行われた。

そもそも学部卒業生のみならず、飛び級入試で3年から修士を修了した若い人々から、実社会で活躍し退職後に入学研究を始めた者、現職を同時にこなしながら研究を続けた者まで、多様な年齢職業の院生ばかりであった。このような背景の上に、毎年10名前後と修了者が少ないこと、専攻領域を超えた研究交流が限られていること等、

大学院の同窓会を発足させる機会を逃し続けてきた。が、すでに100名以上の修了者があり、今後の修了者の活躍や交流、さらには母校の発展を考えると同窓会組織が必要との声があがっていた。そこで森山賢一人間科学研究科教授ら学内関係者などを中心に同窓会発足の準備を昨年来進め、発会式を迎えた。この春には14名が人間科学研究科修士課程を修了する。来春には初のコミュニケーション振興学研究科からの修了生が巣立つであろう。修了生のますますの活躍が期待される。

さて、大学院同窓会を発足させた直後、2月1日には常磐大学連合同窓会も発足した。大学院同窓会も連合同窓会を構成する一組織として、母校全体のさらなる発展を祈念しつつ協力を続けていく決意を発会式において確認している。関係者の皆様、修了者の皆様には今後とも温かいご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。次第である。

泉町再開発で実践的な街づくり!

只今授業中!

サービス産業論
国際学部・小川先生



に分かれ、それぞれ百貨店内でのコト(サービス)の演出。若者の来客促進。街づくり、泉町の活性化」という3つのテーマから、新店舗の新規来客促進案を発表した。

国 際学部の小川明教授が担当する『サービス産業論』の授業で水戸市の中心商店街を活性化させるプロジェクトが推進され、中央ビル8階の会議室において2月3日、最終プレゼンテーションが行われた。このプロジェクトは、泉町再開発の核となる『水戸京成百貨店』の全面的な協力で実現した。約1年後にオープンを控えた新店舗の運営に関する企画提案など、非常にリアルなシミュレーションとなった。



A 会場には小川先生のゼミ生も駆け付けプレゼンテーションを見守った。
B パワーポイントを駆使して行われる発表は、かなり実践的なものだ。
C プレゼンテーションの終了後には水戸京成百貨店の方々と懇談会が開催された。実社会にふれるという意味でも、今回のプロジェクトは有意義なものとなった。



プロジェクトがスタートしたのは、昨年の10月。まず水戸京成百貨店の担当者のほか、泉町開発に関係する多くの方々が出席。「実際に実施したいと思える提案が多く、新店舗スタートの際の参考にさせていただきたい」と、高い評価をいただいた。協力いただいた水戸京成百貨店専務取締役の原山美之さんは「サービスという抽象的なものをいかに具体化していくかは、非常に難しい部分があります。しかし、学生の皆さんはよく勉強なさっていて驚かされました」と、学生たちのプレゼンテーションを賞賛。参加した国際協力学科3年の根本大樹さんは「このプロジェクトで学んだことをどう役立てるか模索していきたい」と語り、国際ビジネス学科3年の石井美恵子さんは「メンバーが提案したことをまとめるのに苦労しました。この経験が就職活動にも活かしていきたいです」と、活用方法を見つけたようだ。また国際ビジネス学科3年の糸井隆彦さんは「サービスというカタチのないものを提案するのは大変でした。でも無事プレゼンを終えることができ、大きな自信になりました」と、充実したプロジェクトを振り返っていた。



C プレゼンテーションの終了後には水戸京成百貨店の方々と懇談会が開催された。実社会にふれるという意味でも、今回のプロジェクトは有意義なものとなった。



キラリと KIRARIBITO

●クラブDJ

DJとして、音で人を楽しませたい!

将来はDJをつきつめ、アーティストとの共演、音の創造やCDリリースも視野に入れ、幅広い方向性を探っていききたいと考えています。

現 在、水戸を拠点としてクラブDJの活動を行っています。一昨年「ニューヨーク・ビート・デパートメント」というレコードプールの審査に応募し認められていたことから、月々送られてくる50枚ほど、所有している2000枚のレコードの中から音を追っています。

イ イベントの持ち時間は、約1時間。その間を1曲とみなし、途切れることなく曲をかけ続けます。自分は技術面の配慮に加えて、プレイに対して常に客観的な視点で見ることが、ゲストに楽しんでいただくために、人の心の動きや全体の雰囲気把握し、状況に合わせた選曲を行うことを重要視しています。そういった場面で役立っているのは、大学で学んだ心理学。また今後仕事としていくために、ビジネス的な要素は欠かせません。その知識を得られたのも、大学での大きな収穫でした。



人間科学部
組織管理学科4年
友部 陽介

●弓道四段

主将を務めて学んだことを生かしたい。

でも、教え方を学ぶことはコミュニケーション能力を高めることにつながり、現在大学で取っている教職課程だけではなくさまざまな分野に応用できますよ。将来は範士の称号を取って指導者になり、学生弓道を盛り上げていきたいです。

言 道の練習は、ひたすら弓を引くこと。中には一日に100本以上も引いている人もいます。私は練習でも矢を一本も外さないように、気持ちを込めて引くことを心掛けています。そんな弓道の魅力は自分に負けなければ負けることはない、というところ。自分が外さえないなければ必ず勝つので、結局自分との戦いになるわけです。その駆け引きが面白いですね。

弓道部主将を務めてから、自分の考えをみんなに伝えることの難しさがよく解りました。人はそれぞれに意見を持っていきます。しかし「部」という全体のためには、協調することの大切さも理解してもらわなければなりません。他人を思いやること、そして組織をまとめることは本当に大変です。



人間科学部
人間関係学科3年
伊東 孝敏

●弓道四段

弓道から得たことがたくさんあります。

弓道の一番の良さは、年齢を問わずに楽しむことができること。小さな子どもからお年寄りまで、本当に幅広く競技することが出来ます。私も歳をとっても続けていくつもりです。

私 が弓道を始めたのは高校時代。中学生のとき、警察官に憧れて「警察官になるには集中力が必要だ」と勝手に思い込んだんです(笑)。それがきっかけでした。

実は四段の試験に二回落ちたときは自信がなくなり、挫折するようになってしまった。でも必ず受かると思って練習を続けました。そして、四段を取得、このことを通して、努力を続けなければ結果は見えてくることを学びました。何事も諦めずにやるのが大事なですね。

また弓道部を通して、人それぞれ考え方が異なることも理解しました。そして、どうしたら組織としてうまく機能するのか、学べたように思います。私は人と接することが好きで現在、流通関係の仕事に就くため就職活動を行っています。その経験を社会でも活かしたいです。



コミュニティ振興学部
ヒューマンサービス学科3年
米倉 良美

日々積み重ねてきたことから、得られるものは大きい。今回は、その得られたものを将来に生かし羽ばたこうとしている三人のキラリびとを紹介する。これからの彼らに、どうぞ期待!

いま、沖縄県の平均寿命が、急激に短くなっている。心筋梗塞による働き盛りの男性の死亡率が増加しているのだ。そして現在、将来の日本の縮図として危惧されるこの問題は生活習慣だけではなく特定の遺伝子も関与していることが分かってきた。そこで、医学博士・中島先生に原因と対処法を聞いた。

短期大学生活科学科・中島久美子 助教授に聞く — 生活習慣病 —

俊約遺伝子を理解した生活習慣病の予防・改善を啓蒙

人類を救った遺伝子と生活習慣病の関係

ここ数年で大きく変化した社会環境は、私たちの生活習慣に大きな影響を与えている。自動車の普及や交通網の発達による運動不足、豊かな食生活による栄養過多、これらが引き金となる問題のひとつが「生活習慣病」だ。

「いま、生活習慣病に対する栄養士の取り組みが重要視されています。栄養士が働く病院や高齢者福祉施設などには生活習慣病やメタボリック症候群と呼ばれる代謝性疾患を持つ患者が多く、正しい知識に基づく対処が必要になってきているのだ。」

短期大学・生活科学科の中島先生は、臨床医学の領域から代謝性疾患の研究を進めている。生活習慣病とは、主に肥満、高脂血症、高血圧、糖尿病などの病気で、それをきっかけとして脳梗

- あなたは次の症状にあてはまりますか？
- 体温が36度未満である
 - 月経不順である
 - 手足が冷える（冷感性）
 - 疲れやすく翌朝まで疲労が残る
 - あまり汗をかかない
 - 少し食べただけですぐ太る
 - 肩こり、腰痛がある
 - 普段運動をしない
 - 顔色が悪い
 - 血圧が低い
- 7項目以上当てはまる人は基礎代謝が低いといえる
 - このタイプは俊約体質であるため、痩せにくく太りやすい
 - 解決法は筋肉を増やすのみ！

「生活習慣を改善すれば病気が治る」と思っている方が多いようですが、それは誤った知識です。生活習慣がきっかけとなることは確かですが、最近はいくつかの特定の遺伝子が関わっていることが分かってきました。これは「俊約遺伝子」と呼ばれるもので、この遺伝子が進化している人が肥満をきっかけとした生活習慣病にかかりやすいのです。どのような働きをするのかという点、例えば、3-ARという俊約遺伝子は1日に約200キロカロリーのエネルギーを俊約します。逆に言えば1日に200キロカロリー多く食べて

なかしま くみこ
日本女子大学家政学部卒。医学博士。専門は臨床栄養学、脂質代謝を中心とした動脈硬化。日本臨床栄養学会評議員・編集委員、日本動脈硬化学会評議員、日本老年医学会会員。2003年4月より現職。



「なせいま生活習慣病に対する注意が叫ばれているのかというと、日本の3大死因として癌に次ぐ疾患にあげられているのが、心疾患や脳血管障害などの動脈硬化性疾患であるということ。そして、脳梗塞や糖尿病などは麻痺や壊疽などの後遺症から人間の自由が奪われてしまうということにあります。重度の糖尿病患者になると、ときには両足を切断するような事態になり、要介護状態が残る人生を過ごすことにならなくなるんです。」

「生活習慣を改善すれば病気が治る」と思っている方が多いようですが、それは誤った知識です。生活習慣がきっかけとなることは確かですが、最近はいくつかの特定の遺伝子が関わっていることが分かってきました。これは「俊約遺伝子」と呼ばれるもので、この遺伝子が進化している人が肥満をきっかけとした生活習慣病にかかりやすいのです。どのような働きをするのかという点、例えば、3-ARという俊約遺伝子は1日に約200キロカロリーのエネルギーを俊約します。逆に言えば1日に200キロカロリー多く食べて

「俊約遺伝子が進化していると、太りやすい体質であるとも言えます。肥満は多くの疾患を合併しやすいのも一つも注意しなければなりません。そこで問題になるのがダイエット。特に若い女性は医学的に見て肥満ではないにも関わらず、過激なダイエットに走る傾向があります。しかし、この俊約遺伝子を知らないと、誤ったダイエットに陥りやすいことも事実です。よく見かける悪い方法は、闇雲にカロリー摂取量を減らすこと。1日のカロリー摂取量を基礎代謝程度に抑えれば痩せると考えがちですが、それは大きな

間違いです。基礎代謝とは、人間が何もせずに寝ている状態でどのくらいの熱量が消費されるかということ。生活活動強度が低い学生は、単純に計算すれば、基礎代謝量の低いカロリーしか摂取しなければ痩せることになる。

「ところが、カロリー摂取量が減ると、俊約遺伝子は飢餓を乗り切ろうと栄養を蓄えようとする。つまり、脂肪が多くなった俊約体質になってしまいます。それでも体重が軽くなるのは筋肉が落ちてしまっているから。これでは歳を取ると一気に太りはじめ、生活習慣病にかかりやすくなる危険があります。」

「平熱が低い人や冷感性の人は俊約遺伝子が進化している可能性ががあります。肥満の予防には、基礎代謝を上げることが第一。基礎代謝があがると平熱も高くなります。つまり、基礎代謝量が高くなり体温が上がると、それだけカロリーを消費して太らなくなるということ。では基礎代謝を上げるためにはどうすれば良いのかというと、筋肉をつけること。筋肉はともカロリーを必要とするんです。さらに筋肉がつけば老後の日常生活能力も上がります。」

「現在『沖縄問題』がよく話題に上がります。これは長寿県だった沖縄の平均寿命が短くなっていること。その理由のひとつが心筋梗塞による働き盛りの男性の死亡率の増加です。米軍基地周辺で、若い頃から高カロリー・高脂肪の食物を摂取し過ぎていたことが原因ではないかと言われています。」

「沖縄問題は将来の日本の縮図と言われている。幸せな老後を迎えるために、1日も早い生活習慣病の予防・改善が必要だ。」

林望氏講演会「イギリスを旅する」
旅を通して、多くを想う。



作家・書誌学者 林望氏

常磐大学生涯学習センター特別講座
常磐大学生涯学習センター特別講座
今回講師としてお招きしたのは作家・書誌学者でありケンブリッジ大学客員教授、東京藝術大学助教授等を歴任した林望氏。「イギリスを旅する」と題して行われた講演会には300名の定員を超えて

るたくさん聴衆が詰めかけ、熱気があふれる講演会となった。内容は自身が考える旅のあり方を通し、物事に対して一人ひとりがさまざまな意識を持つこと、そして物事の表面だけではなく側面や裏側も見ることの重要性について。単身イギリス滞在中の豊富な体験を語っていただき「宿ること自体が旅の楽しみ」として、旅先での写真のスクリーンが上映された。そしてユーモアあふれる語り口で、イギリスに加えて、日本や東欧など他の国にも言及、ガイドブックや団体旅行では分からない、旅行の体験談は大変興味深いものであると同時に、多様な視点を持つことの大切さを再認識することになった。また、その後の質疑応答も活発に展開され、大盛況の中終了を迎えた。次回の特別講座も楽しみにだ。



はやし・のぞむ 一九四九年東京都生まれ。作家・書誌学者。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。専門は日本書誌学・国文学。国文学、書誌学の研究論文、エッセイ、小説の他、歌曲等の詩作、能評論、自動車評論等、著書多数。

編集後記
激動する財界、残酷な事件、世界的に頻発する自然災害……。テレビや新聞紙上では、日々、新しい衝撃的なニュースが報道されている。そのあまりの多さに私たちは、つい痛ましい数々の出来事を記憶の中に埋もれさせてはいないだろうか。今回、特集を組んで取り上げた『国際被害者学研究所・第2回シン

ボジウム』の二日目で、基調講演を行う予定だったエデュアルド・ウエテレ国連国際犯罪防止センター長が急きょ欠席した。その理由は、スマトラ沖地震による津波の被災者に対応するため、ウィーン本部を駆け戻らなければならないからだ。当然、現地はまだ混乱状態が続いている。しかし、その事実を認識している日本人がどれくらいいるだろうか。被害者を救済するためには、市民一人ひとりの意識の改革が必要だ。